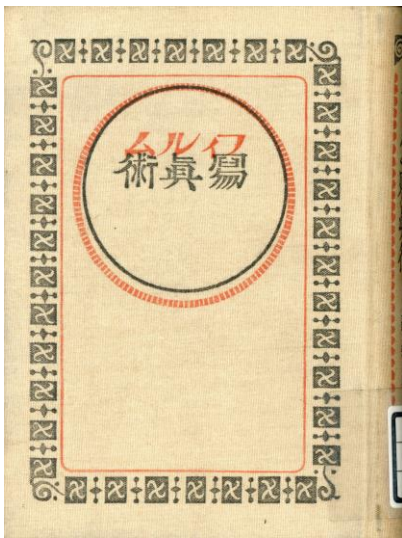


写真人とその本 3 / 高桑勝雄

日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

たかくわかつお
高桑勝雄（1883-1955）は、1912年から小西本店で『写真月報』の編集を担当し、1917年にはアマチュア向け冊子『写真の趣味』の創刊に携わりました。同誌の初心者に向けた的確な内容が、同じく初心者向け指導書『写真のうつし方』（阿蘭陀書房・1916年）を著していた三宅克己の目にとまり、1920年には三宅と共に会員制通信教育形式の『写真術講習録』（アルス）発行に携わりました。同講習録の反響を受けて、翌年にはアマチュアに向けた初の月刊写真雑誌『カメラ』創刊へ至りました。高桑は同誌の主筆に就任し、雑誌統廃合で休刊となった1940年12月号まで中心となって編集に携わりました。

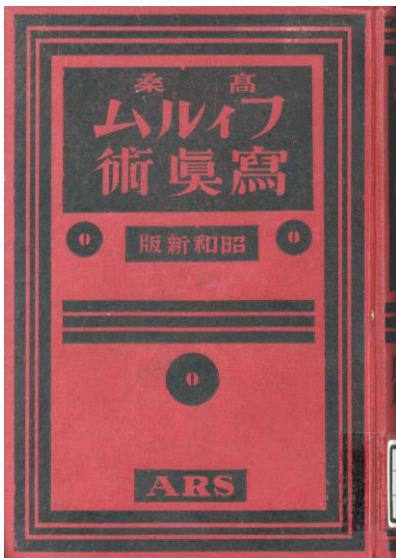


『フィルム写真術』

雑誌編集、初心者向け講習活動の一方で、個人の著作として1920年11月にアルスから『フィルム写真術』を上梓しました。

同書は自らの知識と経験を基に、写真術の基本的な流れをできるだけ平易に解説しています。また基本手順が「表面」なら「裏面」にあたるものとして「高桑式簡略主義の寫眞術と秘傳數種」と称し、茶碗やお盆を計量容器や現像用品に使用するアイデア、多用途に使える現像液の処方などを紹介し、「写真術」とは決して格式ばった堅苦しいものではないことを説いています。巻末には「寫眞家の知り置くべき事」として、計量単位の換算表や薬品処方、種板寸法図、禁止地域撮影許可願の書き方、薬品英和对訳一覧などが掲載されています。

アマチュアに向けて写真術全般をわかりやすく解説した類書がなく、かつハンディサイズで必要な時すぐに参照することができ、価格も1円80銭（『カメラ』創刊号は50銭）と比較的手ごろであったことで、同書は好評を博し1935年までに200版以上の増刷を重ねました。その間には1922年2月の66版から「改訂増補版」となり、1923年9月の関東大震災で紙型焼失のため、1924年1月の140版から改版しました。1931年7月には「昭和新版」として、整色・天然色フィルムについての記述追加や引伸技法の解説を拡充するなど、内容を時代に即したものに大改訂しました。



『フィルム写真術 昭和新版』

また1922年には、海外写真雑誌記事を基に興味実益に富むもの50題を翻訳再構成した『写真術五十講』、1923年には『フィルム写真術』の続編として、初心者が疑問に思うことの多い事項をまとめた『写真問答』をアルスから発行し、1930年には写真処方事典の『写真薬品の知識』を、自らが興した「日本写真出版社」から発行しています。